

ウワナベ古墳造出裾採集の 須恵器・土製模造品

1 はじめに

佐紀古墳群東群を構成するウワナベ古墳は奈良盆地北縁の低丘陵に位置する前方後円墳で、1969年度の平城宮第60次調査において出土した埴輪列と、その際に造出裾で採集された須恵器、土師器、土製模造品が知られている¹⁾。近年では造出裾採集の埴輪の整理・検討が進み、当古墳における埴輪配置の様相もあきらかになりつつある²⁾。今回、造出裾での採集品と思われる新資料の存在が判明した³⁾。須恵器5点、土製模造品3点の計8点の資料は、『平城報告 VI』で報告されている、赤彩された須恵器や土製模造品と共通した特徴をみせることから、同時期、同地点からの採集品であると推測される。これらを整理・報告するとともに、既報告資料との比較検討をおこなう。

2 採集資料の概要

須恵器 1は杯蓋片で、天井部から口縁部直上にかけての破片。天井部はやや丸みを帯びる形態が想定される。口縁部との境界は鈍い突帯をめぐらす。焼成前の塗彩によって、両面にはぶい赤褐色を呈する。とくに外面には塗彩時の刷毛の痕跡が残り、ガラス質化して光沢を帯びている。残存長1.8cm。2、3は小片のため、器種不明。2は外面に1単位5条以上の櫛描波状文を施す。3は外面に列点文を施すが、文様の間隔は不均等である。ともに焼成は良好で、胎土は粗い。焼成前の塗彩によって暗赤褐色を呈する。残存長2.1cm。

4、5は高杯形器台で、長方形透孔を配する脚部片。形態等から、杯部との境界に近い、脚部上段側にあたると考えられる。両面に回転ナデ調整、内面には粘土紐積み上げ時のユビナデが残る。4は3条の櫛描波状文が施文され、上段は1単位7条以上、中段は6条、下段は5条となり、各単位で施文のストロークが異なるのが特徴的である。5は下端に鈍い突帯が1条残存し、突帯で区画された文様帯に、少なくとも2条の櫛描波状文が施文される。波状文は、上段は1単位6条、下段は1単位8～9条である。ともに褐灰色や灰色を呈する堅緻な焼成

で、胎土には白色・灰色粒を含む。いずれも残存長4.5cm前後。

土製模造品 6、7は円柱状の片側側面に切り込みを入れる形態で、切り身状と称される土製模造品。ともに完形品。作り方は共通しており、粘土を棒状にのばしてナデで整えたのち、両端をヘラ状工具で切断して面をなす。上面を鋭利な工具で刺突して、断面V字状の2本の切り込みを入れる。灰白色を呈する須恵質で、胎土には白色・灰色粒を含む。6は全長2.6cm、幅1.6cm、厚さ1.6cm。7は全長2.6cm、幅1.6cm、厚さ1.4cm。8は魚形。手づくね成形後に尾鰭を上下につまみ出して表現するが、背・胸鰭の表現は曖昧である。目は刺突によって表現されるが左右非対称である。口は線で表す。明褐色を呈する土師質で、胎土には白色・灰色粒を含む。全長2.9cm、幅1.2cm、厚さ1.8cm。

3 採集資料の検討

既報告資料との比較 『平城報告 VI』では、ウワナベ古墳造出裾採集資料として、須恵器杯蓋2点、杯身1点、高杯片2点、甕片5点、蓋類破片2点、高杯形器台片1点、土師器片、そして魚形2点、棒状1点の土製模造品が報告されている。これらと本資料の特徴を比較すると、須恵器杯蓋は天井部と口縁部の境界に鈍い突帯をめぐらす点、高杯形器台は文様構成や施文の特徴が共通する。さらに、焼成前に外面を赤色塗彩するという大きな特徴や、胎土の面からも共通している。焼成前の塗彩は器種が不明な2、3も同様で、文様構成を参考にすれば、2は高杯形器台杯部や壺口頸部、3は高杯形器台杯部のような部位が推測される。土製模造品は個体ごとに差異をみせるが、胎土や焼成雰囲気は須恵器と類似することから、これら本資料は、既報告資料とともにウワナベ古墳造出裾部からの一括資料と評価できる。

土製模造品の位置づけ 以上のように、ウワナベ古墳からは須恵器・土師器とともに、魚形や切り身状を呈する複数の土製模造品の出土が確認でき、採集位置を考えると、これらは造出裾採集の埴輪とともに、本来はくびれ部西側の造出上にあったとみてよい。造出における同様の事例は行者塚古墳に代表され、埴輪で囲繞した内部で、土師器高杯や笊形土器とともに食物形の土製模造品を供献する古墳祭祀の様子が復元されている。土製模造

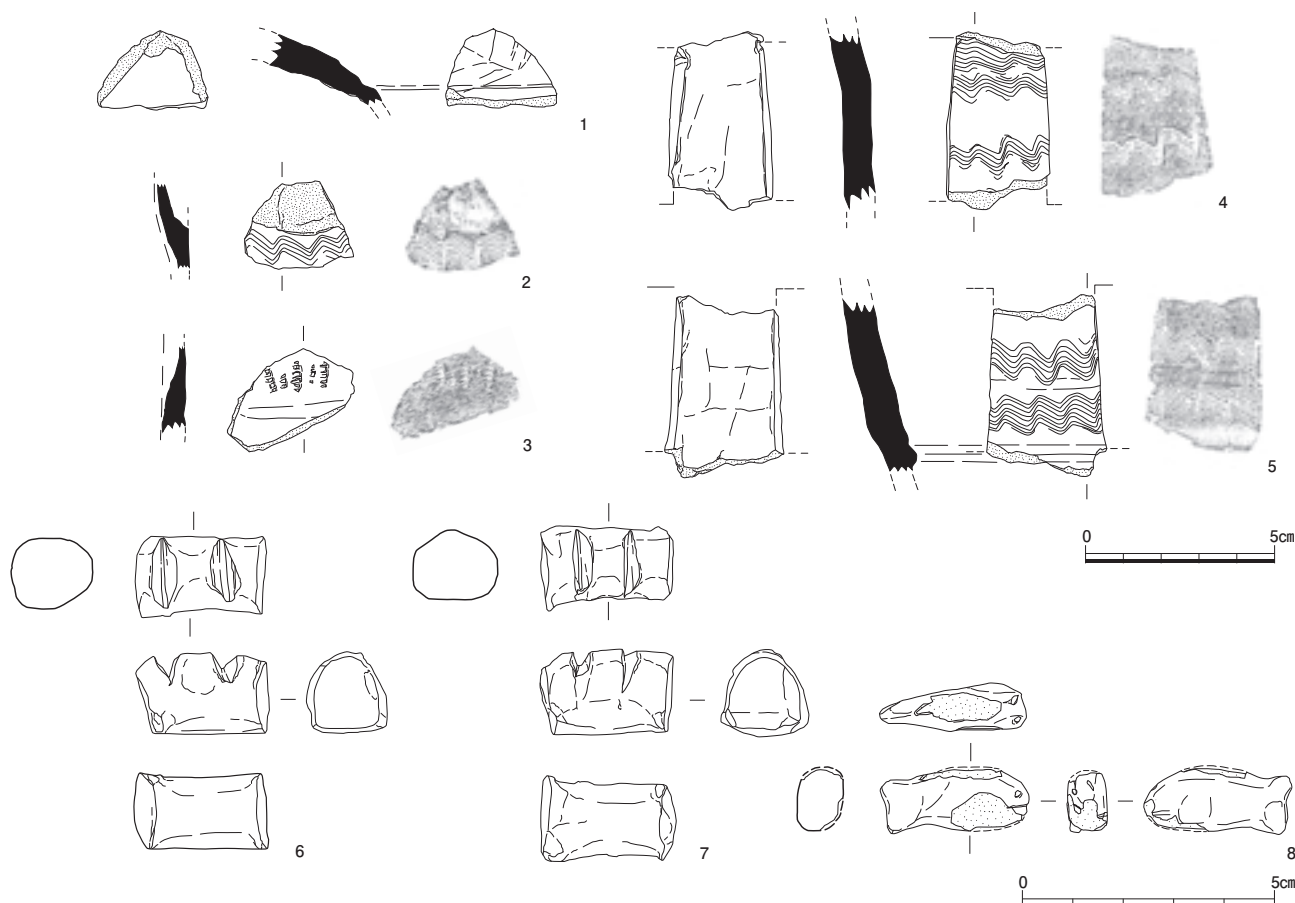


図14 ウワナベ古墳造出裾採集資料実測図 1:2 (1~5) 2:3 (6~8)

表3 切り身状、魚形の土製模造品出土古墳一覧

古墳名	所在地	時期	墳形・規模 (m)	出土位置	形態	全長 (cm)	幅 (cm)	点数	須恵器	土師器	埴輪	備考
行者塚古墳	兵庫	5 c 前葉	前円・99	西造出	切り身状	7	2.5	1		○	●	このほかに、餅状、菱の実状、アケビ状、鳥形、笄形土器も出土
					切り身状	7	2.5	1				
野中宮山古墳	大阪	5 c 前葉	前円・154	後円部頂 (表採)	魚形	(5.5)	2.5				○	
誉田御廟山古墳	大阪	5 c 中葉	前円・415	周濠	※	(6~12)	2.4~3.2	5			○	クジラ・イルカとされる
御廟山古墳	大阪	TK216	前円・203	造出上面	棒状 (魚カ)	(4.2)	(2.4)	1カ	○	○	○	笄形土器も出土
ウワナベ古墳	奈良	TK216	前円・255	造出	魚形	2.9	1.2	1	○	○	○	『平城報告 VI』掲載資料
					魚形	(6.5)	2.4	1				
					棒状	5.1	1.8	1				
瓦塚1号墳	奈良	5 c 前葉	前円・97	くびれ部	魚形	(8~11)	3~4	6カ			○	円盤形も出土 墳頂部からの転落

【凡例】前円：前方後円墳、数値の () は残存値を示す、●：圍繞する埴輪列内から土製模造品が出土する例。

品は5世紀代に畿内をはじめとする大型墳・首長墳を中心に展開する傾向にあり、とくに魚形は大型墳に多い⁴⁾。ウワナベ古墳の場合、行者塚古墳等でみられる笄形土器は確認されていないが、切り身状の土製模造品の存在から、同様の古墳祭祀が想定される。

4 まとめ

ウワナベ古墳造出上では、埴輪とともに須恵器・土師器、土製模造品による造出祭祀の様子が復元できる。そして、埴輪、須恵器に共通する赤色塗彩からは、埴輪生産と須恵器、そして古墳祭祀との密接な関係が示されており注目される。いっぽう古墳の年代は、須恵器の特徴から、TK216型式に比定されてきた⁵⁾。近年の再整理に

よって出土埴輪の実態がさらに明確になってきたことは前述したが、土器・土製模造品に関しても、本資料とともに既報告資料を再整理をすることで、時期的検討にくわえ、当該期の古墳祭祀の実態解明についても、検討をおこなっていききたい。

(松永悦枝)

註

- 1) 『平城報告 VI』1975。
- 2) 大澤正吾「ウワナベ古墳造出裾周辺採集の埴輪」『紀要2018』。
- 3) 本資料は現在、奈文研で保管している。
- 4) 松永悦枝「土製模造品からみた古墳祭祀と笠置峠古墳」『笠置峠古墳』愛媛大学法文学部考古学研究室・西予市教育委員会、2017。
- 5) 植野浩三「埴輪生産と須恵器工人－奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして－」『文化財学報』11、奈良大学文学部文化財学科、1993。